

上原が晩年に展開したこうした医療批判や宗教批判を、一九六〇年前後の「国民文化論」時代の彼の思想との連関において読み直してみると、それが今日の生命倫理や死生学の問題意識を先取りしていることに驚かされる。上原の主張の眼目は、現代の医療や宗教によって私たちが生と死の課題にきちんと向きあうことを妨げられているならば、私たちはそうでないような新しい医療文化や宗教文化を、今、ここで自分たちのかけがえない人生を生きる「生活者」の視点からつくり直していかなければいけない、という点にある。こうして「宗教的立場から生命倫理を問う」のではなく「生命倫理の深みから宗教を問う」上原は、一九七〇年代後半以降の「霊性知識人」の先駆けとしても評価できよう。

### 西郷隆盛はキリシタンだったか？

坂 本 進

西郷さんが、キリシタンであったという説を発表されたのは、鹿児島・西郷南州顕彰会館長の高柳毅先生です。先生は、顕彰会誌『敬天愛人』十四号(一九九六年)において、この説を公刊されました。爾来、この考えを堅持され、研鑽を重ねておられます。

まず、西郷が聖書を読んだかどうかということについては、有馬藤太が、西郷より聖書を貸与されたという証言から、読んだことが確認されています。

では、いつごろ、誰から、西郷が聖書を入手したかということについては、幕末に通訳として活躍した外交官、アーネスト・サトウから入手したという説が有力視されています。又、当時、薩摩は密貿易を行っていたので、香港・上海で発行された聖書を入手したとも、考えられます。慶応二年から三年頃と推定されているのです。

「西郷さんが洗礼を受けていたかどうか」ということについては、四年前(二〇〇七年)、顕彰館で開催された「敬天愛人と聖書展」に、福岡から訪れた参加者が、「西郷は洗礼を受けていた」と証言したことが、西郷キリシタン説を一層有力なものにさせました。彼は、西郷が洗礼を受けたという洗礼証明書を見たことがあるが、その証明書は、戦災で焼失してしまったと、証言したのです。その日付けは、明治五年頃、つまり西郷が内閣を組閣していた頃のことであったというのです。文明開化となつてキリスト教禁教令が撤廃され、公にキリスト教を信じる自由が与えられるようになり、西郷さんも宣教師から正式に洗礼を受けるに至ったというわけです。

また、幕末に既に西郷さんはキリシタンになつており、薩摩藩の河邊(かわなべ)一族の屋敷で聖書を講じたり、種子島へ聖書を教えに行ったりしていたという言い伝えもあります。これは、薩摩島津藩と対抗していた川邊一族三十八代当主川邊二夫氏の証言により確認されています。幕末に、既に、西郷さんはキリスト教を信じ、入信していたことなのです。

西郷さんと切つても切れないことばがあります。それは、「敬天愛人」ということばです。このことばの出典は儒教の教

えから来ていますが、西郷さんの「敬天愛人」のことばには、儒教のわくにとどまらないものがあります。

「二十一 道は天地自然の道なる故、講学の道は敬天愛人を目的とし」

「二十四 道は天地自然のものにして、人はこれを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給うゆえ、我を愛する心をもって人を愛する也」

「二十五 人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己を尽くし人をとがめず、我が誠の足らざるをたずぬべし」

これらの西郷のことばの中には、キリスト教的愛のエコー(こだま)があります。また、西郷の生き方、身の処し方の中には、苦しみを共に担うーコンパッションの生き方があり、これは、西郷がキリシタンであったことを証示しているように思われるのです。

### 久米邦武の幸福論

西田 みどり

大正九年(一九二〇)、『歴史地理』(第三五巻)に発表された久米邦武の「西洋物質科学の行詰り」は、科学技術が人々の生活を大きく変えようしている時代にあつて、「西洋物質科学」は行き詰まることを強い筆致で指摘したものである。当時、農業にはトラクターが使われ始め(米)、普及すれば人間の厳しい

農作業が大幅に軽減される可能性が見えていた。日本では豊田織機が紡全工程機械製造に成功した。複写機が発明され(独)、電話が広範囲に普及し、ラジオの実験放送が始まるなど、情報流通の面にも革命的な変化が起き始めていた。電動機推進の航空母艦も建設された(米)。科学技術はさまざまな分野に新しい機材をもたらし、世界を変えようとしていたのである。

そんな中で発表された久米論文は、科学技術がもたらすものを「商売の競争に後る」といふより外には(同論文)意味はないとし、「静かに思慮をなし、自然を楽しむ余地を喪失するではあるまいか」(同)としている。なぜ、久米は大正九年の時点でこのような見解を持ちえたのだろうか。

岩倉使節団の記録掛りとして明治四年から六年にかけて一年九カ月にわたって米欧を視察し、その詳細な記録を『特命全權大使米欧回覧実記』(全百巻、明治十一年出版)としてまとめた久米は、同書の中で視察した工場など科学技術の粋を集めた設備を克明に描写している。そのときの視点は科学技術の力を肯定したもので、日本の「後れ」を認めている。

しかし、一方でその差はたかだか五十年程度のものに過ぎず、日本は追いつくことができるとも言ふ。その根拠は、科学技術発達の差の原因が才能の優劣にあるのではなく、生きるうえでの思想の違い、価値観の違いにあるからである。人間の力を助力する機械を発明する道を進んだ西洋に比べ、東洋は技術の発達に執着せず哲学的な研究にその知を費やした。それを転換すれば科学技術を発達させるのはたやすいと見ているのだ。

久米が指摘する西洋と東洋の思想、価値観の違いは六点であ